
エブロード王国物語 - 伯爵令嬢とお針子 -

hiro33

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エブラード王国物語 - 伯爵令嬢とお針子 -

【Nコード】

N4871Y

【作者名】

hiro33

【あらすじ】

メリア・アスザーラには、ちょっとした夢があった。自分を引き取ってくれたおばさんのお店服飾店『朱双樹の雫』をおっきな店舗にして、おばさんを楽にさせてあげることだ。

エブラード王国にある、まだちっさな服飾店だけれどおつきくすればそれだけお金入るし、生活の潤いもあるんじゃないかって思ったんだ。このお店の看板お針子？かは謎だけど、前世の記憶をうまく使ってエブラード王国で名のあるお店にするのが夢。はてさてどうなることやら…

伯爵令嬢とお針子（前書き）

書き方を、少し変えた話もやってみたかったので載せてみました。
こっちはある程度書いてから投稿していく感じになるかと思っています。

伯爵令嬢とお針子

伯爵令嬢とお針子

1

通称、お針子通りと呼ばれるのはエブラード王国の西門を通り大通りから左道一本入ったガルハン通りのことである。

服飾を扱う商店が多いことから別名お針子通りと呼ばれており、エブラード王国の服飾文化を支えている。

「メリア、注文した刺繍系の数と在庫の系の数を確認しておくれ。後はビーズの方の在庫確認もだよ」

店の名前は、服飾店『朱双樹の雫』（あけそうじゅ）

店名に朱を付けていることから、比較的多くの赤い色を使った物を扱っている。

先代店主が、赤系の物が好きだったらしいのが発端らしいがメリアにはどうでもいいことだ。

「はい。ヒルダおばさんY-23の刺繍系の在庫が少なくなってるから注文したほうがいいわ。あと他にもあるみたいだから、後で書いて渡すんでいい？」

刺繍系の種類は各色平均20〜30色

色分けが直ぐに分かるように、Rが赤系Bが青系Yが黄色と大まかに分けられているのだが、刺繍系の棚の在庫管理は、メリアの任せられているため常に在庫を切らさないように気をつけている。

後はビーズの管理も同様であった。

「ああ正確な数を頼んだよ。そうそうメリア。この色の刺繍系とビーズの用意しておいておくれ」

渡された紙には50色くらいの刺繍系の番号と欲しい糸束の数が記入されている。

ビーズの方は20種類ほどだろうか。

「ヒルダおばさんこれお貴族様のところ？」

こんなにまとめて購入するのはお貴族様くらいだ。

業者だともっと細くなるし、日時指定で配達日が決まっている。

「そうだよ。お貴族さまで刺繍が流行っているらしくてね。この前作った小物に刺繍とビーズを組み合わせて作った小物入れが好評だったみたいで、あれを参考にしたいからと、お貴族様んこのお針子からの注文数が多いのさ。家は他に負けない色の種類あるからね」

服飾店は多いのだが、あくまでも注文した服や既製品の服を売る店の方が多く、『朱双樹の雫』のように服飾材料を一般人にも売る店は多くない。なので服飾材料の注文をする客は刺繍をする貴族かかえのお針子からくる。

「わかったわ」

忘れる前に終わらせてしまおうと、ついでに在庫管理のチェックもしてと、することが多く忙しい。

「おはようメリアちゃん。今日は良い天気になりそうだね」

カランと店のドアが開き、通いのお針子のおばちゃんたちが次々と

出勤してくる。

「おはようございます〜」

『朱双樹の雫』では、通いのお針子が8人いる。大抵が近所のおばちゃん連中だ。4歳の頃に、両親が死んで叔母であるヒルダに育ててもらいながら、この店で育ったメリアはおばちゃんたちのマスコットでもあった。

出勤してきたおばちゃんたちはまず2階へ向かい、おのこの作業机の上でその日ごとの作業をする。

1着のドレスをみんなで作ることもあれば、新製品の開発などその時ごとにすることは違うがアットホームな雰囲気この店がメリアは好きだった。

「さて私もがんばるからね」

まずは先におばさんから受け取った注文書の刺繍糸とビーズを探し、その後は在庫管理の確認作業と今日する必要作業の順番を決めていく。

忘れないようにと、作業内容を記入するノートの用意しておく。服飾材料の種類が多すぎるため、記憶力に自信のないメリアは常に確認作業の時はメモをかかさない。

「うーん……電卓ほしいなあ」

ハツとなって周囲を確認する。誰にも聞かれていないようだ。

「気をつけないと。誰に聞かれるかわかんないし、かと言って異世界って本当にあつたんだねえ……」

メリア・アスラーザには誰にも言っていないが、異世界の住人だった頃の記憶があつた。

ヒルダおばさんに引き取られる前の年に、大病を患って一度死にかけたことがあって、まだその時生きていた両親が言うには、すっごい熱が何日も続いて死んでしまうのではないかと思われたみたいだった。

ミナミ・ミズサキそれが、前世の自分の名前だ。覚えている限りでは、自分は突っ込んでくる車に轢かれて死んだと言うことと、43歳だったよな〜と思った。

結婚はしていなかった。

普通に会社でOLして自分の好きなように生きていたと覚えている。自分がメリア・アスラーザとして生まれ変わったのか、ミナミ・ミズサキとしてメリア・アスラーザに憑依したのかもわからない。

ただ現在花の16歳に、異世界で生きた記憶の43歳を合わせた精神年齢59歳のおばちゃんな自分を思うと、恋愛なんてこれっぽっちも湧いてこない。

まあ行き後れ上等！

今生も、自分の好きなように生きてみせる。と誓うメリアだ。

ある日、突然ミナミとしての記憶が蘇った。

まだ3歳の子供が、流暢に大人なみの会話をこなすのは、変だし実は異世界の住人だった頃の記憶がありますなんて言い出したりしていたら、痛い子と思われるからなんとか隠し通して今にいたるのだ。

「住んでみれば、結構大変だけど、人間慣れるもんよね」

この世界の両親が流行り病で亡くなったのは悲しかったが、ヒルダおばさんに引き取られたのは人生でもめっちゃラッキーだと思う。

「ハンクラーの血が騒ぐ！この材料の山って！」

ふふふつと笑いがとまらない。

前世に比べれば、布の種類など少ないけれど、余ったハギレもらい放題だし、刺繍系とかも多くなければ自由に使用可能なのだ。ヒルダおばさん様々だ。

ただミシンがないのが残念すぎる！

誰か作ってくれないかなと思うが、大まかな構造しかわからないし、自分で開発なんて無理すぎる。

仕方ないから手縫いでがんばってるよ。

「さて、頼まれた注文書の確認OK。刺繍系の在庫OK。ビーズの在庫もOK」

足りない材料の注文をしてもらうため書き込んだメモも揃えて2階に上がる。

「ヒルダおばさん。頼まれた仕事終わり。お昼ついでにライラの鍊金工房寄ってもいい？新商品の開発お願いしてるんだけど、その様子みたいだね」

鍊金工房が、なぜ服飾店の新製品の開発に必要なのかヒルダにはさっぱりとわからなかったが、幼馴染の友人を訪ねるようなものと捉えているから、了承する。

ヒルダおばさんには言っていないが、自分なりに店の目玉になるものを開発して店の知名度を上げるのが目標だ。

「あの子また食事抜いてないか、見ておくれ。あの子の分も買って持って行っておやり」

手に20ルーグを持たせてくれた。

ルーグはこの国の通貨だ。

1ルーグ100円くらいで、一食を外食するのに5ルーグもあれば満腹に食べられる。

20ルーグもくれたのは、好きなものを買えと言うことかな。

「ありがとうヒルダおばさん。絶対に新製品の開発して、お貴族様がこの店ならって言ってくれるようなお店にするわ」

子供が持つ夢って、おつきくでつかいなくと思われていても気にしないメリアだった。

ライラの錬金工房へ向かいながら、途中食べ物の露店をはしごしつつ、真新しい物を見つけては購入してみる。

異世界人の聖王のおかげか、この国の食事情もかなり改善されつつあるのが嬉しい。聖王サマサマなので、もっと色々やってほしい。食材を見た限りでも、かなり似通うものが多く、違いはと言うと色だったり、食材の味くらいかな。

困るのが、まだまだ調味料関連が少ないってことくらい。

「あとは甘い菓子系が少ないのは不満だけだね」

どうもこつちの世界に来る異世界人は、菓子作り方を知る人いない、または流通するほど作られていないみたいと、思わずにいられないほど

菓子は余りない。あるのは果物類が中心なようで、いかに加工して菓子にする発想がないのかもしれない。

ただ聖王サマのお城内がどうなっているのかわからないから、お城だけで流通している菓子はあるのかもしれないかなと思ったりはしている。

お城にツテなんてないから確認が出来ないのが残念。

「おっと。おじさんそれくださいな」

揚げパンモドキを見つけて声をかける。1個1ルーグと安く。2個のお買い上げだ。

そんな風に露店の買い物をしつつ、ライラの錬金工房まで、角を曲がってすぐのところまで困っている風の少女を見つける。

自分と同じくらいか、やや下の年齢だろうか？

ポメラニアンもどきの犬？を連れている。

この世界にも犬がいるかは知らないが、まんまポメにしかみえない。撫でたいな。あのふわふわ。でも咬みつきそうなきもするんだよね。尻尾ぜんぜん振ってないし、他人に誰が媚売るかな感じたもん。

「どうかしました？」

良いとこのお嬢さんぽい感じかな。服装は平民が着るにはかなり上等な出来具合だし、髪留めなども品良く高そうな品とわかる。

「…いえ」

困った風に足元をみる。

「なんだ靴のかかと取れちゃったんだね。これくらいなら、友人が直してくれるよ。」

すぐそこにある錬金工房なんだけど、どうする？誰か待ちならほっとくけど」

ちょっと困った感じのお嬢さんに、この子ならどんな服も似合うだろうなあと、ジロジロ見て思う。

私も、これくらい可愛く生まれ変わったなあと考えつつだ。

『…オイ、ニンゲン…』

なんだこの声は…

「えええっ。犬のくせにしゃべってるし」

こっちの世界の獣ってしゃべるんですか？

初めて知ったこの事実！

『オマエ、タスケロ。…コイツ…アクイナイ』

へっつとポメもどきの犬をみる。犬っていうより魔犬かな。

「はい。この仔は私のガーディアンドックです」

「ガーディアンドック？」

守ってくれる犬ってことなのかなあ。まんまだね

「はい。私に対し悪意ある者には、襲い掛かるように訓練されてま

す
」

「ほーっ。こんなちっちゃいのにな偉いねーワンちゃん。んじゃ行こう。貴方の騎士じゃないけど、困った人を助ける程度なら私にも出来るしね」

こっちだよっと。

びっこ引く感じであるく女の子を連れて、ライラの錬金工房へとむかったのである。

伯爵令嬢とお針子 2

2

店先には、何かなんだか分からないものがごちゃごちゃと置かれている。

「こんにちは、フラウくん店番ご苦労様。これ差入れ」

ここにくる途中の露店で買いあさった食べ物と渡す。フラウくんは犬耳を持った獣人だ。
嬉しそうにフリフリする尻尾が、可愛いと思ったのは内緒かな。

「ありがとうございますメリアさん。ライラお嬢さんなら、奥でエミリーさんとミリアさんが来ているので一緒にいると思います」

「わかった。ありがとうございます。ライラ来てあげたわよ」

「いらっしゃい。メリアちゃん後ろの人は？」

エミリーがライラに変わって返事をした。

ライラは、と言うと何か作業に没頭しているようだ。

「こんにちは。靴のかかと取れちゃったみたいで、困っていたから連れてきたミリアこの子の靴みてくれないかな」

「わかった。ちょっときたないところですが、我慢してください」

空いている椅子に座ってもらい、壊れた靴をミリアに渡す。

ミリアは、家が靴屋をしていることもあって靴の直しはそう難しくないとのことだ。

「……凄いお部屋ですね」

どのような用途の物かわからないが、ごっちゃになって見えるよう
でいてきちんと整頓されている。

「この整頓はメリアちゃんだよ。ライラだと整頓できないから、
わかるように名札ついたり物の場所は絶対決めた所に入れろって、
ここまできたんだけどね」

当のこの部屋のヌシは、今だ何かの作業をしていて後ろ姿しかみえ
ない。

「とりあえず、お昼ごはんにしようと思って露店で色々買ってきた
んだ。エミリーテーブル片付けお願い。私はお茶の用意するから」

はいつと買ってきた物を渡す。

「自己紹介はお茶しながらにしよう。とりあえず、準備しちゃうか
ら」

5人分の茶葉の用意と、ミルクに角砂糖。好みで蜂蜜でいかな。
甘い物系は、まだまだ手に入れるのは大変だけど、砂糖と蜂蜜はち
よっと奮発すれば手にはいる。

お菓子に加工してある物が、なかなかないのが不満なんだよね。

自分で作れって。えゝ面倒なんだよね。こつちの世界の窯の調整とかわからないしなあ。

「さて、こんな感じで良いか。ライラご飯兼お茶会にしよう」

「…ご飯……」

朝からろくに食べていなかったらしい。

「んじゃ食べながらでいいので、まず私からメリア・アスザーラ服飾店『朱双樹の雫』のお針子してます。ってもおばさんのお店だから多少の自由があるんだ」

「私はエミリー・ルース『歡樂の都』の末っ子してます。『歡樂の都』ってのは、大人のおじさんくるお店なんだけど、私は良くわかんない。お姉さんたちがまだ早いって言ってたよ」

「ミリア・エルヴァー家は靴屋だ。ほら直しておいたから、確認してくれ」

「ありがとうございます。助かりました。私は、エルネシア・ビーガウ今はこのような姿ですが騎士見習いをしてます」

「最後にライラ！黙々と食べてないで、会話しなさいな」

本当に、この子は大丈夫なんだろうかと思う。

「ライラ・ブルースここの持ち主…親父が錬金術師」

『オレヲ、ワスレンナ！』

ワンワンと、まさにポメが吼えてる姿は、和むわ。

「しゃべった！メリアちゃんにこの仔。魔獣？かわいい。さわっていい？ふかふか」

エミリーが可愛いを連発して触りまくっている。

『オイ…ヤメ』

害意がないためもあって、エミリーにだっこされまくっている。

「へー。女の子だね。私エミリーよろしくね」

『……………』

あらぬ所をばっちり見られたらしい。

「その仔はガーディアンドックです。今は私の護衛と言うことになっています」

「でも、騎士見習いって女の子でもなれるの？」

騎士って、響きはかつこいいけど女の子がなれるものなのかな？

「はい。我が主人が女性ですので、女性だけの部隊があります。主に近辺警護が中心です」

「そうなんだ。エルネシアちゃんは、騎士見習いかあ。んでこの仔の名前は？」

すりすり、よほど気に入ったのかエミリーが抱っこしてはなさい。

「J-02です」

Jシリーズの2番目だかららしい。

名前っていうより単なる記号だと思っただけだね。

「えー。言いにくいよそれ。ちゃんとした名前つけたほうがいいよ。護衛してくれる犬っていうても名前あるほうがいい！」

「ですが、私の一存では決められません。これらは個体管理されているのです」

「ならさJシリーズならJの付く名前に出来ないか提案すれば？ちゃんと世話してるのに、記号呼びだと言にくいですとかで提案するのはありだと思うよ。はいこれ熱いから気をつけて、好みでミルクと砂糖か蜂蜜いれてね」

メリアは、エルネシアに紅茶を入れたカップを渡す。

「そうですね。戻ったら提案してみます。ありがとうございます」

「メリア…これ完成させたから」

ずっと黙々と食べていたライラが食べ終えて暇になったからか、木箱に入った陶器製の物を差し出す。

「さすがライラ！これで何代目だっけ…」

「改良加えて12代目。細かい直しとなると覚えてない」

木箱から取り出したそれを、私はテーブルの空いたスペースへ置いていく。

「なんですかこれは？人形？」

「うん。ここで見たことは、誰にも言わないでね。いずれは流通させると思うけど、まだまだ試作なんだこれ」

取り出した部品を皮ひもで繋げて様子をみることにした。この世界にゴムがあれば、楽なだけだなあとはいつも繋げて1体の人形の形にする。

「だいぶバランスが良くなったな。前回の型とそう違いはないみたいだし、この靴入るか試してくれないか」

赤、黒、茶色の人形サイズの皮靴をミリアから受け取る。

「メリアちゃん、これ前回預かった頭。顔はこんな感じで良いの？」
エミリーはメイクを施した頭部を見せる。

「メリア、あと注文しておいた瞳は6色ほど届いている」

次から次へと出てくる様々な物に、驚くばかりのエルネシアだ。

「ベースメイクはこれで、瞳は蒼として、ドレスは何色がいいかな赤でいいか」

「なかなか良い感じだね」

大体人形としては、かなり出来がよくなってきたとは思っただけ、うーん。

どうも気に入らないのだ、何故って前世だかの記憶がある私としては人形はこの状態で支えなくても立ってほしい。

「立たないなあ。なんかこう伸びる紐ってないのかな」

ゴム紐が欲しいいいい。と思っただけど、ない物はないんだよね。

「伸びる紐ですか？ロゼリオラの髭なら、伸びたりしますよ？」

「ロゼリオラの髭？なにそれ！教えてどうしたら手に入るの、このさい髭でもいいから、ほしいいい」

ロゼリオラとは、植物系の魔獣らしいです。

髭が2本生えていて、うねうねと伸び縮んだりするらしいです。

「魔獣レベルはDなので、冒険者ギルドへ依頼すればいいかもしれません。実物の確認したければ、防具屋へ行けば見えますよ」

知らなかったこれは、実物の確認をしないと！

「ちょっと、向かいの防具屋見てくる」

誰も止める間もなく、メリアは防具屋へ行ってしまった。

「まあ、あの子らしいわ。とりあえず戻ってくるまで食べよう。エルネシアは食べられないものある？」

ミリアは、蜂蜜かけのパンもどきを差し出す。

「大丈夫です。普通に露店の買い食いもしますよ。今日はちょっとこの仔の試験してたんです。たぶん合格もらえると思います」

「ガーディアンドックだっけ？」

エミリーに散々抱っこされまくり、触りまくりでグッタリしている。

「メリアさんに会うまでに、8人ほどの男性の方が声かけてきたのですが、全て撃退しました」

下心を持つ男がそれだけ多かったと言うことだ。

騎士見習いといっても、普通に女の子らしい格好をすれば、下心で寄ってきた男が多かったのだろう。

『オレ、エライ？』

「女の子がオレって言わないの！。アタシとかワタシだよ」
エミリーはダメだしをする。

『オレハ、オレ！』

これだけは譲れないと、自己主張するJ・O2であった。

伯爵令嬢とお針子 3

3

ライラの錬金工房の向かいにある防具屋は、皮製品を主流とした防具を扱っているのか皮製品の防具が所狭しに並べられている。

「おじさんロゼリオラの髭見せて髭！」

カランとドアに付けたベルの音を鳴らせながらメリアは、髭、髭と連発する。

「どうしたんだいメリアちゃん？」

「おじさんロゼリオラの髭って、伸び縮みするって本当？」

まずは髭の検証しないかね。

「ああ…？ちよいまってくれ持ってくる」

店の奥の在庫置き場へ取りに行く。

「ほら何に使いたいかわからんが、ロゼリオラの髭はこうなっているぞ」

おじさんが見せてくれた髭は、見た目は黒くバラのトゲトゲのような物がびっしりとついていて気持ちが悪い。

「おじさんこれ、どこが伸び縮みするの？なんか思っていたのと違うね」

こんな状態で伸び縮みするのでは使えないではないか。

「そりゃこれは加工前だからさ。ほれ、加工後はこうなる」

近くに展示されている革防具をみせて、加工するとこうなるのだと見せてもらう。

おじさんが言う髭の加工部分は、外見の黒さとは違いやや灰色がかった感じた。

触って加工後の髭の伸び具合を見れば、なかなか弾力がありまさにゴムっぽい。

ただ少し硬いような気もする。

「おじさんこれの加工後の物が欲しいんだけど、売って貰うのはできるかな？」

加工が難しいなら頼んで加工後の製品で購入するしかない。

「メリアちゃん なんに使うか知らないけど、これは加工は楽だよ」

トゲが刺さらないように皮手袋をして手持ちサイズのナイフを取り出すと、髭の根元に切り込みをいれて、あとは剥くだけだ。

「力は多少必要だがね」

瞬く間に黒いトゲトゲ部分を剥いていく。

ただ剥いただけでは、私が使いたいゴムの太さを考えるとまだまだ

太すぎる。

「でもこれ、太すぎるよ。もっと細く使いたい時どうするの？」

これではゴムひもみたいに縛ることもできない。

「ああ細くするのはこうすりゃ良いのさ」

使いたい大きさに軽く切り込みを入れ、それにあわせて裂けば良いだけらしい。

細く使いたければ小さな切り込みにしてと、調整するくらいのことだ。

「おじさんこれ欲しい！定期的の購入したい時は買うこと出来るの？」

これはなんとしても手に入れねばと思う。

ロゼリオラの髭なんてものが、あつたのさえ知らなかった自分が恥ずかしい。

「そうだな。全部は無理だが、今回は少し売ってもいいぞ。この店でも使うから、定期的に欲しいのならてつとり早いのは、冒険者ギルドへ定期的に買いに行くといいぞ。髭は、長さで重さで買取価格は冒険者ギルドで決まっているようだしな。それ以外だと直接依頼をだして冒険者から買う方法もある。ただこれだと髭の長さが短いものになるかもしれん。短くてもかまわないのなら、冒険者に依頼したほうが安く買えるかもしれんな」

「わかった。ありがとうこれ1本いくらで買えば良い？とりあえず5本ほど欲しいな」

「そうだな1本2ルージュでどうだ？おまけして短すぎて使えそうにない部分をつけてやるぞ」

適正価格なのかわからないが、オマケつきなら買いかなと思う。

「わかったありがとうおじさん。はい10ルージュ」

「まいど。短いやつは袋に入れてあるこつちだ。長いのはそのままでもいいな」

おじさんから髭の加工品を受け取る。

これでまた理想の人形に近づいたかなって思いながら。

■ ■ ■ ■ ■

「たっだいま」

ほくほくと持ち帰った髭もといヒゲゴムと名称をつけよう。

「遅いよ。ほらメリア先にこれ食べちゃいなさい」

お皿に色々のせた物を受け取る。

そういえばおなかすいていたっけ。

「ごめ〜ん。これ買ってきた。私が食べている間に、人形に通して

くれる？立つか様子みたいしね」

まずは食べてしまおうと、冷め切ったお茶をのみながら露店で購入した料理を食べる。

「んゝ冷めても美味しいね」

調味料は、やはり数は少ないけれどそれぞれの工夫がされている。これも聖王サマのおかげだね。

「メリアのめり込むのもいいけど、何をどうしたいのか説明してくれないと、こっちが困るわ」

メリアなりに考え行動してるのは分かるのだが、唐突すぎる行動力にいつも後で説教するのはミリアだ。

「ごめゝん。伸び縮みする髭が気になって、つい防具屋行っちゃってたわ」

「こんな感じで良いのメリア？」

エミリーが、ヒゲゴムを通した人形に体を見せる。

「うん…首で縛ってくれる？できればなんかつつかえして首でとめるの」

ちと下品かもだけど、とつとと食べてお茶で流しこんでしまっ。

「ふうゝご馳走様。ごめんねエルネシアさん。でも髭のこと教えてくれてありがとうすぐく助かった」

紐で縛って繋げる状態だけでもよかったのだけど、あのダランとした感じが気に入らなかったんだよね。

「いえ、良くわからないのですが、ここで人形を作っていると言うのは理解しました」

メリアの唐突な行動力には驚いたが、こういった工房での作業を見るのは面白い。

「うん。商業用に流通させようと思ってさ」

「商業用ですか？」

人形は飾るためにあるものだと思うのだが、商業用とはどういうことだろう？

「さてエルネシアさんは部外者だけど、ここまで出来たから発表します」。あゝその前に人形何体用意出来るのライラ？」

「7体だ。急がなければ追加で5体用意できる」

「わかったありがとう。何をしようかと考えているのかは、この人形をまずは服飾店の関係者に売り出します」

メリアが言うには、ドレスなどを作る所でこれを買ってもらうのだと言う。

理由は、貴族の方からの注文を受ける時の見本ドレスを人形用で作

り、お屋敷へ直接人形ごと持って行くことだと言う。

出来上がったドレスを沢山詰め込んで貴族のお屋敷へ持って行く大

変さを考えると、小さく運べるのだから利点は大きいとのことだ。

「ただ問題は、誰が買ってくれるかなのよね。」

こればかりは、初めてみないと分からないからおばさんに頼んで店で子供用のドレスから始めてみようとは考えている。

「あのう…私の主に話しても宜しければ、取次ぎはできるかもしれません。」

新しい物好きな主人の性格を思うと、絶対話を聞けば1番に名乗り上げるはずと思うのだ。

「本当？話を聞いて貰うだけでも助かるかな。皆はどう思う？」

「流通はよくわからないが、私は靴を作っていればいいのか？」

ミリアが自分が何をすべきか聞く。

「そう。靴は種類あると助かるかな。出来たら買取するよ。あとで値段決めようね。」

「私は？ミリアちゃん」

エミリーが、自分にも何かすることがあるのか聞いてくる。

「一番大事な事をエミリーには頼むよ。人形の顔メイクをお願いすることになるかな。これはエミリーにしか出来ないからね。」

自分でしてもいいのだが、そうなるとこの世界のメイクと顔が違い

すぎてしまうので、『歡樂の都』のお姉さんたちのメイクを参考で
きるエミリーが一番かなと思うのだ。

「わかったミリアちゃん。…そうだライラちゃん、後で人形の頭何
個か頂戴。練習用に欲しいんだ」

うなづくライラは、箱ごとエミリーに即渡す。

どうやら失敗などを考えて、各部位ごとに数はかなり用意してはい
るようだ。

人形の体と眼はライラが担当になり、ウィッグや服はメリアで、メ
イクがエミリー、靴がミリアと決まる。

イレギュラーでここにいるエルネシアも、このまま巻き込んでしま
ったほうが面白いかもしれないと考える。

「んじやさエルネシアさん。ここにこうしているのも縁と思って、
お友達になりませんか？騎士見習いさんと、身分の違いは大きすぎ
るから友人は無理って言うならあきらめますが…」

前世、身分制度なんて化石だった日本人からすれば、この世界の身
分制度から平民が、（ミリアはお針子になるのだが）お友達になっ
てと言うことは不敬罪にあたるかもしれないのだが…。

「いいですよ。なんか楽しそうですし、今後よろしくお願いします」
エルネシアは、余り身分にこだわるような性格でなかったのか、あ
っさりと了解した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4871y/>

エブロード王国物語 - 伯爵令嬢とお針子 -

2011年11月28日00時52分発行